

Germanien

ゲルマーニエン

Herausgegeben, übersetzt und kommentiert von Kenichi Onodera

テキスト編集・翻訳・注釈：小野寺賢一

Germanien.

ゲルマーニエン

Nicht sie, die Seeligen, die erschienen sind,
Die Götterbilder in dem alten Lande,
Sie darf ich ja nicht rufen mehr, wenn aber
Ihr heimatlichen Wasser! jezt mit euch
Des Herzens Liebe klagt, was will es anders
Das Heiligtrauernde? Denn voll Erwartung liegt
Das Land und als in heißen Tagen
Herabgesenkt, umschattet heut
Ihr Sehrenden! uns ahnungsvoll ein Himmel.
Voll von Verheißungen und scheint
Mir drohend auch, doch will ich bei ihm bleiben;
Und rückwärts soll die Seele mir nicht fliehn
Zu euch, Vergangene! die zu lieb mir sind.
Denn euer schönes Angesicht zu sehn,
Als wärs, wie sonst, ich fürcht' es, tödtlich ist
Und kaum erlaubt, Gestorbene zu weken.

Entflohene Götter! auch ihr, ihr gegenwärtigen, damals
Wahrhaftiger, ihr hattet eure Zeiten.
Nichts läugnen will ich hier und nichts erbitten.
Denn wenn es aus ist und der Tag erloschen
Wohl trifft den Priester erst, doch liebend folgt
Der Tempel und das Bild ihm auch und seine Sitte
Zum dunkeln Land und keines mag noch scheinen.
Nur als von Grabesflammen ziehet dann
Ein goldner Rauch, die Sage drob hinüber.

彼ら、かつて姿を現した浄福の者たち、
あの古の国にある神々の像、
彼らを私はもはや呼び寄せてはならないのだ、しかし
あなたがた 故郷の水たちよ！いまあなたがたとともに
心の愛が嘆くとき、ほかに何を望むだろうか
神聖な悲哀に満たされたこの心は？ なぜなら期待に満ちて横たわっているのだから
この国土は そして炎熱の日々のように
低く垂れ込めて、今日 その影で私たちを覆うのは
あなたがた憧れる者たちよ！予感に満ちた一つの天。
約束で満ち また
迫りくるようにも思えるが、それでも私はこの天のもとに留まろう。
わが魂は後ろ向きに逃げ去るべきではないのだ
あなたがたのほうへと、過ぎ去りし者たちよ！あなたがたは私にはあまりにも愛おしい。
というのもあなたがたの美しい顔を、
あたかも以前と変わりがなかったかのように見ることは、私を恐れさせ、死をもたらしからだ
そしてほとんど許されないからだ、死んだ者たちを呼び起こすことは。

逃げ去りし神々よ！そしてあなたがたも、いまなお現存している神々よ、あのころあなたがたはもっと真なる存在で、あなたがたの時間があったのだ。

私はここで何も否定せず 何も請い求めはしない。

というのもすべてが終わり 日の光が消えると

運命に最初みまわれるのはきっと祭司なのだから、しかし愛を抱きつつ

寺院と像 そして祭司のしきたりが彼のあとを追ひ

暗い国へと向かう まだ何も輝き出すことはできない。

今度はただ墓の炎からのぼったかのように

黄金の煙、すなわち伝説が上空で向こうに漂っていくのみ。

Und dämmert jezt uns Zweifelnden um das Haupt,
Und keiner weiß, wie ihm geschieht. Er fühlt
Die Schatten derer, so gewesen sind,
Die Alten, so die Erde neubesuchen.
Denn die da kommen sollen, drängen uns
Und länger säumt von Göttermenschen
Die heilige Schaar nicht mehr im blauen Himmel.

Schon grünet ja, im Vorspiel rauherer Zeit
Für sie erzogen das Feld, bereitet ist die Gaabe
Zum Opfermahl und Thal und Ströme sind
Weit offen um prophetische Berge,
Daß schauen mag bis in den Orient
Der Mann und ihn von dort der Wandlungen viele bewegen.
Vom Aether aber fällt
Das treue Bild und Göttersprüche reegen
Unzählbare von ihm und es tönt im innersten Haine.
Und der Adler, der vom Indus kömmt,
Und über des Parnassos
Beschneite Gipfel fliegt, hoch über den Opferhügeln
Italias, und frohe Beute sucht
[Dem Vater, nicht wie sonst,] geübter im Fluge
Der Alte, jauchzend [überschwingt er]
Dem Vater, nicht wie sonst, auf beiden Seiten
Den Fittig spannend, mit gespaltenem Rücken überschwingt er
Die Alpen zuletzt und sieht die vielgearteten Länder.

30

35

40

45

[46]

[47]

30

35

40

45

[46]

[47]

そしていま われら 疑惑にとらわれた者たちの頭上を曙光が覆う、
わが身に何が起きているのかを知る者は誰一人としていない。感じられるのは
かつてあのように存在した者たちの影、
あのようにこの地を再び訪ねる古の者たち。
なぜなら来るべき定め of 者たちがわれらに迫り
神々にも等しき人々の
聖なる一団はもはや青き天でためらい留まっていはいないからだ。

そうすでに芽吹いているのだ、より荒々しい時代の序曲のなかで
彼らのために耕された野は、供物も整えられている
供犠の宴のために そして谷と河流は
預言の山々を囲んで広く開かれている、
そのため男は東方の果てまで見渡すことができ
数々の変化が彼の心をそこから揺り動かす。
しかしエーテルからは
神を忠実に模した像が落ちてきて 神々の託宣の雨が
無数に降り注ぎ 林苑の最も奥深きところで音が鳴り響く。
そして鷲が、すなわちインダスから来て、
パルナソスの
雪に覆われた頂や、イタリアの供犠の丘の
上を空高く飛び、父のために喜びの獲物を探す鷲が
[かつてとは違い、] 熟達した飛翔で
[47] 齢を重ねた者として、歓喜の声をあげながら
かつてとは違い、両方の
翼を広げて、背中を二つに分ち
アルプスをついに越え さまざまな国々を見わたす。

Die Priesterin, stillste Tochter Gottes[,]
Sie, die zu gern in tiefer Einfalt schweigt[,]
Sie suchet er, die offenen Auge[s] schaute
Als wüßte sie es nicht, jün[g]st, da ein Sturm
Todtdrohend über ihrem Haupt ertönte;
Es ahnete das Kind ein Besseres,
Und endlich ward ein Staunen weit im Himmel
Weil Eines groß an Glauben, wie sie selbst[,]
Die seegnende, die Macht der Höhe sei;
Drum sandten sie den Boten, der, sie schnell erkennend
Denkt lächelnd so: dich, unzerbrechliche, muß
Ein ander Wort erprüfen und ruft es laut
Der Jugendliche, nach Germania schauend:
Du bist es, auserwählt,
Allliebend und ein schweres Glück
Bist du zu tragen stark geworden

Seit damals, da im Walde versteckt und blühendem Mohn
Voll süßen Schlummers, trunkene, meiner du
Nicht achtetest, lang, ehe noch auch geringere fühlten
Der Jungfrau Stolz, und staunten, weiß du wärest und woher,
Doch du es selbst nicht wußtest. Ich miskannte dich nicht,
Und heimlich, da du träumtest, ließ ich, **ein Brautiger**
[Am Mittag] scheidend dir ein Freundeszeichen,
Am Mittag **wo viel Fieber unser harreten, Seufzen der Creatur,**
Die Blume des Mundes zurück und du redestest einsam.
Doch Fülle der goldenen Worte sandtest du auch
Glückseelige! mit den Strömen und sie quillen unerschöplich

かの祭司、このうえなく静かな神の娘であり
深い純真さに包まれてあまりにも好んで沈黙する彼女を
驚は探し求める、目を開いて
まるで何が起っているのかを知らぬかのように、ごく最近、一つの嵐が
頭上で死の脅威とともに鳴り響いたとき、ただそれを眺めていた彼女を。
この幼子はより良きものを予感していたのだ、
そしてついに天に驚きが広がった
なぜなら信仰において偉大なる一人の幼子が、彼女自身のように
祝福をもたらす者、至高の力であるとみなされたからだ。
それゆえ彼らはこの使者を遣わしたのだ、彼は、彼女を即座に認め
笑みを浮かべて思う、あなたは、不壊なる者よ、
ある別の言葉によってその真価を試されなければならない、と そして
この若々しい者は、ゲルマーニアのほうを眺めつつ、高らかにその言葉を叫んだ。
あなたこそは、選ばれ、
すべてを愛する者 そして重い幸運を
担いうるほどあなたは強くなった

あのときから、森のなかに隠されて咲きほこる芥子のなかで
甘美なまどろみに浸って、酔いしれた者よ、あなたが私のことを
気にもとめなかったあのときから、長いこと、もっと卑しい者たちですら
この乙女の誇りを感じ、あなたが何者でどこから来たのかと驚く以前には、
あなた自身もそれを知らなかったのだ。私はあなたを見誤りはしなかった、
そして密かに、あなたが夢を見ていたときに、私は **一人の花婿として**
[真昼に] 別れを告げながらあなたに友情のしるしを、
真昼に **多くの熱が私たちを待ちこがれていたそのときに、被造物の嘆息を、**
口の花を残した そしてあなたは孤独に語った。
しかし あなたは溢れんばかりの黄金の言葉も送り出したのだ
浄福に満ちた者よ！ さまざまな河流とともに その言葉は滾々と湧き出て

62

75

In die Gegenden all. Denn fast wie der heiligen,
Die Mutter ist von allem, **und den Abgrund trägt**
Die Verborgene sonst genannt von Menschen
So ist von Lieben und Leiden
Und voll von Ahnungen dir
Und voll von Frieden der Busen.

80

O trinke Morgenlüfte,
Biß daß du offen bist
Und nenne, was vor Augen dir ist.
Nicht länger darf Geheimniß mehr
Das Ungesprochene bleiben,
Nachdem es lange verhüllt ist;
Den Sterblichen gebühret die Schaam
Und so zu reden die meiste Zeit
Ist weise auch vor Göttern.
Wo aber überflüssiger, denn lautere Quellen
Das Gold und Er[n]st ist worden der Zorn an dem Himmel
Muß zwischen Tag und Nacht
Eins mals ein Wahres erscheinen.
Dreifach umschreibe du es,
Doch ungesprochen auch, wie es da ist,
Unschuldige, muß es bleiben.

90

95

O nenne Tochter der heiligen Erd'

62

75

すべての地域に注ぐ。というのも
万物の母であり、深淵を担う者
ふだんは隠された者と人間たちによばれるあの聖女とほとんど等しく、
愛と懊悩
そして幾多の予感と

80

平安でああなたの胸は満たされているのだから。

おお 飲むがいい朝の風を、
あなたが開かれるそのときまで
そして名指すがいい、あなたの目の前にあるものを。
もはや秘密が

85

口にされないままであってはならない、
それが長いあいだ隠されていたあとでは。
死すべき定めにある者たちには恥じらいがふさわしい
そしてそのように話すことは 大抵のとき
神々の前でも賢明である。

90

だが、清浄な源泉のかずかずよりもたくさんの
黄金が溢れ出し 天の怒りが深刻なものになっているときには
昼と夜とのあいだに
一度は真なるものが現れなければならない。
あなたはそれを三重に書き換えるがよい、
しかし真なるものは、そこにあるがままにして、
無垢なる者よ、口にしないでおく必要もあるのだ。

95

おお 名指すがいい 聖なる大地の娘よ

Einmal die Mutter. Es rauschen die Wasser am Fels
Und Wetter im Wald und bei dem Nahmen derselben
Tönt auf aus alter Zeit Vergangengöttliches wieder.
Wie anders ists! und rechthin glänzt und spricht
Zukünftiges auch erfreulich aus den Fernen.
Doch in der Mitte der Zeit
Lebt ruhig mit geweihter
Jungfräulicher Erde der Aether
Und gerne, zur Erinnerung, sind
Die unbedürftigen sie
Gastfreundlich bei den unbedürftgen
Bei deinen Feiertagen
Germania, wo du Priesterin bist
Und wehrlos Rath giebst rings
Den Königen und den Völkern.

100

105

110

いつの日か母の名を。水たちは岩間でざわめき
嵐は森のなかで轟いている そしてそれらの名において
過ぎ去った神的なものが古の時代より再び響きわたる。
いまやそれはなんと異なることか！そしてひたすらに輝きかけ 話しかけてくる
来るべきものが 喜びにも満ちて 遠くのほうから。
しかし時の中央では
聖別された
純潔の大地とともにエーテルが静かに息づいている
そして追憶のために、彼らは喜んで
足るを知り
足るを知る者たちのもとで歓待の念を示すのだ
あなたの祝祭の日々には
ゲルマーニアよ、そこであなたは祭司を務め
武器を手になく周囲に助言を与える
王たちと諸々の民に。

100

105

110

編集注記

初出はベルトルト・リッツマン (1857–1926) によって編集され、1895年末ごろにシュトゥットガルトのコッタ社から出版された『ヘルダーリン詩集』である。現在確認できる二つの手稿はともに清書稿であるが、一つ目の清書稿 (以下「旧稿」) は「断片となった」(ザトラー版) もので、112行のうち1行から97行までしか含んでいない。旧稿はのちにホンブルク二つ折りノートに転記された。この二つ目の清書稿 (以下「新稿」) はすべての行を含む。今回の校訂と翻訳では新稿の訳出を目標とし、読者が手稿と比較して検証しやすいように、ホンブルク二つ折りノート右上に付された頁数を**太字**の数字 (59-63) で記した。なお、この頁数はヘルダーリン自身によるものではなく、カール・リッツマン (1815–1890) が書き加えたものであると考えられている。詩行群を隔てる空白は旧稿と新稿に共通して認められ、旧稿にはヘルダーリンの義弟カール・ゴック (1776–1849) によって1から7の詩節番号が書き加えられている。新稿は旧稿とほぼ同じであるが、わずかながら変更箇所があり、さらに新稿に手を加えようとしたと思わしき箇所もある。これらの箇所に対する各版の対応はまちまちである。両稿に違いがある場合旧稿の記述が採用されることが多く、また新稿の改作箇所は度外視されることが多い。こうした問題を抱えているのは主に以下の7箇所である。

① 46–47行にみられる追記による改作の跡。追記部分は**太字**で、また削除されたわけではないが追記と入れ替えるべきだと考えられる部分は網線で記す。網線内の □ は文意が読み取りやすいように校訂者が行った補足である。この追記はクナウプ版とレイタニ版では本文に採用されているが、ヘリングラート版、ツィンカーナーゲル版、バイスナー版、シュミット版、ザトラー版では採用されていない。翻訳では高木訳のみが採用、手塚訳と川村訳では不採用。

② 48行冒頭は手稿ではZuletzt die Alpenと書かれているが、Zuletztの上に2、die Alpenの上に1という番号が付されている。これは語の入れ替えを表すと考え、Die Alpen zuletztとした。クナウプ版とレイタニ版でも同様の措置がとられているが、ヘリングラート版、ツィンカーナーゲル版、バイスナー版、シュミット版、ザトラー版では元の語順を採用している。

③ 70–71行にみられる追記による改作の跡。追記部分は**太字**で、また削除されたわけではないが追記と入れ替えるべきだと考えられる部分は網線で記す。網線内の □ は校訂者による補足である。この追記箇所もクナウプ版とレイタニ版では本文に採用されているが、ヘリングラート版、ツィンカーナーゲル版、バイスナー版、シュミット版、ザトラー版では採用されていない。翻訳では高木訳が採用、手塚訳と川村訳では不採用である。Brautigerはザトラー版やヴェルテンベルク州立図書館のデジタルアーカイヴ「ヘルダーリン手稿カタログ」の判読に基づき、グリムの辞書によれば花婿を意味するというBräutigerのことだと考えられる。バイスナー版、クナウプ版、レイタニ版はBräutigam (花婿) と判読。また、バイスナー版はクナウプ、レイタニ、ザトラーの各版や「ヘルダーリン手稿カタログ」とは異なり、Seufzen (嘆息) をSänften (駕籠) と判読している。

④ 76行にみられるund den Abgrund trägtの追記。**太字**で示す。ヘリングラート版、

ザトラー版、レイタニ版で採用されているほか、クナウプ版ではträgtをfragtと判読したうえで取り入れている。クナウプ版の判読を採用する場合、同箇所は「万物の母であり、深淵に問う者」となる。ツィンカーナーゲル版、バイスナー版、シュミット版では不採用。翻訳では高木訳がクナウプ版の判読を採用している。

⑤ 旧稿の87行目でDenn Sterblichen geziemmetと書かれていた箇所が新稿ではDen Sterblichen gebühretに書き換えられている。この変更が完全に反映されているのはザトラー版のみである。レイタニ版ではgebühretの変更のみが採用されている。手塚訳、川村訳、高木訳ではいずれも不採用。Gebührenとziemenはともに「ふさわしい」という意味である。dennは理由を表す接続詞、denは複数名詞の定冠詞の3格である。旧稿の場合、詩行は「なぜなら死すべき定めにある者たちには恥じらいがふさわしく」となり、「なぜなら (Denn)」は、それに続く文とその直前の詩行「もはや秘密が／口にされないうまであってはならない、／それが長いあいだ隠されていたあとでは。」(84–86行) とをつなぐ役割を果たす。つまり当該箇所では「秘密」が「長いあいだ隠されていた」理由が述べられている。これに対して新稿ではDennがDenに書き換えられることでそうした理由づけが省かれ、ヘルダーリンの後期詩作の特徴である箴言調の響きが聴き取れるようになっている。

⑥ ヘリングラート版は旧稿の89行ではvon Götternと書かれていた箇所が新稿ではvor Götternと読めることを指摘しつつも、書き損じの可能性に留意してvon Götternを採用している。三つの日本語訳も含めて、そのほかのいずれの版もvon Götternとしているが、周囲のvorとvonの筆跡と比べてみるとvorと書かれているように見え、「ヘルダーリン手稿カタログ」でもvor Götternと判読している。ザトラー版がvonに含まれるnを「不確かな判読」としているのは、同箇所がvorにも読めることを示唆している (図1参照)。



図1 (FHA 7, 324より引用)

本稿ではvor Götternを採用する。vonとvorのどちらをとるかは文意に微妙な違いが生じる。von Götternを採用する場合、訳は「そしてそのように話すことは大抵のとき／神々を話題にする際にも賢明であるのだから」となる。つまり、神聖な母なる大地がこれまで名指されなかったことと、神々に直接言及すべきでないこととのあいだに相関性が認められているのである。これに対してvor Götternを採用すると、訳は「そしてそのように話すことは大抵のとき／神々の前でも賢明である」となる。この場合、母なる大地を名指さないことは、そのほかの神々の前でとる態度としても賢明である、という意味になる。つまり前者では神々が神聖なる大地と何らかの親和性をもつように読めるのに対して、後者では神々が大地に対する人間たちの態度をいわば裁定するよう

な立場におかれ、大地と人間、古の神々の関係がより明確になっている。

⑦ 旧稿では97行がO nenne Tochter du der heiligen Erd’ と書かれていたのに対して、新稿ではduが省かれO nenne Tochter der heiligen Erd’ となっている。これを本文に採用しているのはザトラー版のみである。

本稿では以上のすべてを本文に採用したが、新稿の稿体の完全な再現を目指したわけではないことをお断りしておく。たとえばノートでは20行と21行のあいだに4本の線が引かれているが、これは最終的に改作などにはつながらなかったと考えられるので再現していない。これに対して46行と47行、そして76行にみられる下線は改作と関係していると思われるので再現してある。

概要紹介

1801年2月に締結されたリュネヴィルの和約を契機として書かれたと考えられる。詩には長く続いた戦争ののちに訪れた平和の継続、そして新しい秩序に基づく国家体制への期待が込められている。16行を1詩節とする7詩節構成で、全112行からなる。詩の「私」は預言者的な詩人であり、神々の不在に起因する悲哀とその再来の予感とのあいだに立ちながら、過去のギリシャの神々を回顧することを拒み、現在のドイツにとどまる決意を示す。文化の進展を象徴する鷲の到来が告げられると、その鷲が祭司ゲルマーニアに語りかけ、神聖な大地を名指すようにと彼女をうながす。

注釈

表題 ゲルマーニエン

古代ローマ人がゲルマン人の住む地域に与えた地理的呼称。ゲルマーニア。その起源は紀元前222年の碑文に登場するゲルマン人の記述にまで遡ることができる。統一的民族としての古代ゲルマン人をめぐる言説において重要な役割を果たしたのは15世紀に再発見され、『ゲルマーニア』の俗称で広く知られるコルネリウス・タキトゥス（55頃–120頃）の著作、そして西暦9年に行われたトイトブルクの森の戦いである。アルミニウス（前17頃–後21頃）のもとで統一された諸族がローマ軍に勝利をおさめた出来事に、ヘルダーリンはフリードリヒ・ゴットリーブ・クロップシュトック（1724–1803）の戯曲『ヘルマンの戦い（Hermanns Schlacht）』（1769）を通じて親しんでいた。

第1詩節（1～16行）

1行 浄福の者たち

古代ギリシャの神々を指す。その固有名が示されないのは彼らを「呼び寄せてはならない」からである。第1詩節から神々の固有名が登場する「唯一者（Der Einzige）」とはこの点において対照的である。

2行 古の国にある神々の像

古代ギリシャの神像のこと。40行の注を参照。

4行 故郷の水たちよ！

故郷は表題からゲルマーニエンであるとわかる。この呼びかけによって構成される故郷と古代ギリシャの時間的かつ空間的な二項対立は、「唯一者」冒頭の「古の浄福なる岸边」と「祖国」との対比を思い起こさせる。「水たち」はとくに河川を指す。河流はヘルダーリンにとって神的なものが顕現する際にとる形態の一つである。これは神の恩寵の分与を河流などの形象で表す敬虔主義の言語慣習に基づく。「ネッカー（Der Neckar）」「東縛された河流（Der gefesselte Strom）」「ガニュメート（Ganymed）」「ライン（Der Rhein）」「ドーナウの源で（Am Quell der Donau）」「イスター（Der Ister）」などを参照。

6行 神聖な悲哀

「パンと葡萄酒（Brod und Wein）」では神的なものから遠ざかっている現在の状況から「悲哀」（128行）が生じる。「ムネモシュネ（Mnemosyne）」の最終行ではそうした悲哀は「誤っている」とされる。ここでの悲哀はそれとは異なり、神々を再び呼び寄せることが禁じられている点に由来するという解釈もある。

7～9行 国土・天

大地と天の「聖なる結婚（ヒエロス・ガモス）」を暗示。ただしここではまだ「さすらい人（Der Wanderer）」第2稿のように大地が「母なる／大地」（27–28行）、天が「父」および「エーテル」（98行）として呼びかけられることはない。

8行 影

雲による影。荒天を予示する。雲が強力な日光から人間を守っているとも解釈できる。「パトモス（Patmos）」、そして「ムネモシュネ」第2詩節などにはこれに関連して、神的なものは直接顕現せず、間接的に記号を通じて現れるという詩想がみられる。

9行 憧れる者たち

「故郷の水たち」（4行）のこと。ピンダロス断片の翻訳「活力を与えるもの（Das Belebende）」では、あたかも進行方向を探すかのように大地を切り開きながら流れる河のありようが「憧れを抱きながら（sehnd）」と形容されている。

10～11行 約束で満ち また／迫りくるようにも思える

荒天、ひいては雷光の到来を暗示。雷光は神的なものの顕現を象徴する。このモチーフは「盲目の詩人（Der blinde Sänger）」や「あたかも祝いの日にも…（Wie wenn am Feiertage …）」などにみられるほか、本作の91行でも再び取り上げられる。天がある種の脅威とみなされているのは、神的なものとの直接的な交流は死をもたらすと考えられているからである。

13行 あまりにも愛おしい

過去の神々や英雄に対して抱く過剰な愛や悲哀は罪ないしは誤りとみなされる。「唯一者」第1稿の51–53行ならびに「ムネモシュネ」の第4詩節を参照。

第2詩節（17～32行）**17行 逃げ去りし神々**

第1詩節の最後で「死んだ者たち」（16行）とよばれていた古代ギリシャの神々ここでは「逃げ去りし神々」とよばれている。これは第1詩節では現在を基準として過去が回顧されるのに対して、第2詩節では視点が過去におかれ、神々が立ち去った直後の時点から現在に至るまでの過程が記述されているからである。

18行 もっと真なる

ヘルダーリンはギリシア語の語源的意味にさかのぼり、「真である（wahrhaftig）」ことを「非隠蔽性（Unverborgenheit）」の意味で用いている。本詩の92–93行ならびに「パンと葡萄酒」81–82行も参照。

25行 黄金の煙

ギリシアでは死者が火葬されたことから、神々の痕跡を伝える伝説が火葬場からあがる煙に喩えられている。伝説は民衆によって伝播するものであり、その源泉を一人の詩人にまでたどることができない。したがってここには祭司としての詩人の没落が暗示されていると考えられる。キリスト教の時代には神的なものが文字や言葉によって間接的にしか顕現しないことを示唆しているともとれる。「黄金の煙」は「パトモス」27行にも登場する。

26行 疑惑にとらわれた者たち

原語のZweifelndenは「二重化された者たち」あるいは「二つに引き裂かれた者たち」という意味にもとれ、過去と未来に引き裂かれた「私」の状況に対応している。これは神々なき夜の時代に彼らの到来を待ち望む者の基本的なありようである。「キローン（Chiron）」では、ヘラクレスの毒矢の傷に苦しむ半神が、幸福であった過去の思い出と苦痛からの解放への期待とに引き裂かれている状態を、半人半馬である自身の「二重の姿（zweigestalt）」（35行）に重ねあわせる。

第3詩節（33～48行）**33行 より荒々しい時代の序曲**

フランス革命とその後の戦争を表す。

34行 彼らのために耕された野

これから起こる天と地の婚姻を暗示する。

35行 供犠の宴

人間が神的なものを行う「食事」（「帰郷（Heimkunft）」97行）のこと。「さすらい人」第2稿103–108行も参照。

36行 広く開かれている

敬虔主義において「開かれていること」は魂のうちに神々を迎え入れるための準備が整っていることを意味する。ヘルダーリンにとって詩人は神的なものをうたう祭司的預言者であるため、「開かれていること」は詩作の条件でもある。「臆心（Blödigkeit）」の15行を参照。そうした状態がここでは自然のうちに見出されている。「野外へ（Der Gang aufs Land）」の1、18、26行を参照。

37行 男

預言者的な詩人で、この詩の「私」を言い換えたもの。

37行 東方の果て

文化的発展の始原を暗示する。

39行 エーテル

9行ではみられなかった天の擬神化が行われている。

40行 神を忠実に模した像

古代の信仰では、祭祀用の神像は空から降ってくると考えられていた。

42行 インダス

古代ギリシャに先行する文化的発展の起点。「イスター」の7行にも同様の言及がある。18世紀末以前のドイツにおけるオリент受容においてインドが注目されることはほとんどなかった。ヘルダーリンはヨハン・ゴットフリート・ヘルダー（1744–1803）の著作などを通じてこのような発想に至ったのだと考えられる。「詩人の職務（Dichterberuf）」の第1詩節ではインダスから西方へと向かうディオニュソスがうたわれている。方向は逆だが「唯一者」にも同様のモチーフがみられる。

43行 パルナソス

芸術と詩作の神アポロンとムッサたちが住む山。

44行 イタリアの供犠の丘

これからドイツで催されるべき「供犠の宴」（35行）がかつてはこの地で行われたことを示す。パラティヌスの丘とカピトリヌスの丘、ひいてはアポロンやユピテルあるいはカピトリヌスの三神が示唆されているという説もある。「祖国のための死（Der Tod

fürs Vaterland)」の12行に登場する「供犠の丘」は英雄の死地を意味することから、ここでの「供犠の丘」はナポレオン率いるフランスとの戦争を暗示していると考えられる者もある。

45行 父のために喜びの獲物を探す鷺が

ゼウスの鷺がガニュメートを攫った神話の暗示。鷺じたいは文化の伝播を表す。「ドーナウの源で」35–42行では創造的な言葉の展開が東方から発してギリシャとイタリアを経由し北方へと至る運動として記述されている。

46～47行 両方の／翼を広げて、背中を二つに分ち

当初は「熟達した飛翔で／齢を重ねた者として、歓喜の声をあげながら」と書かれていた。変更の理由の一つは、「齢を重ねた者」という表現が鷺を「若々しい者」とする61行の記述と矛盾するからであろう。もう一つには、より具体的な形象化を目指す後期ヘルダーリンの詩法が影響していると考えられる。

48行 さまざまな国々

中部および北部ヨーロッパの国々、あるいはドイツの小国分立状態を指す。

第4詩節（49～64行）

49行 かの祭司

61行で名指されるゲルマーニアのこと。

49～50行 このうえなく静かな・沈黙する

静かさと沈黙はいずれも敬虔主義の語彙に由来する。「このうえなく静かな」という形容詞の最上級は、来るべき神々を迎え入れる用意が一番整っているのはドイツであることを示唆している。ヘルダーリンは1797年1月10日付のヨハン・ゴットフリート・エーベル（1764–1830）に宛てた書簡のなかで「静かで、慎み深く、多くのことが思索されている」ドイツにおいて将来生じるであろう「心情や表象様式の革命」について語り、「一つの国家が静かに成長すればするほど、それが成熟した折にはいっそう壮麗なものとなる」と述べている。静けさがエーテルと結びつけられている「帰郷」23–24行も参照。

50行 純真さ

タキトッスの『ゲルマーニア』では古代ゲルマン人の素朴さや純潔が強調されている。敬虔主義の文脈では神的なものを受容するうえでの不可欠の条件をなし、ヘルダーリンにとっては祭司としての詩人の前提でもある。「詩人の職務」第2稿62行を参照。

51行 目を開いて

ゲルマーニアが目覚め自然のなかに神的なもの認めることができるようになった状態を表す。36行の注を参照。

52行 一つの嵐

フランス革命後の戦争を暗示する。

54行 幼子

敬虔主義においては「純真さ」（50行）の理想像。マタイ18章3節には「心を入れ替えて幼子のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」とある。「あたかも祝いの日に…」62行、「ディオティマを悼むメノンの嘆き（Menons Klagen um Diotima）」52、61行、「臆心」20行を参照。

56行 彼女自身

母なる大地を指す。

60行 ある別の言葉

62行からはじまる鷺の発言のこと。

61行 若々しい者

鷺がこのようなよばれるのは、旧約聖書の「詩篇」103章5節「[……] こうしてあなたはふたたび若返り一羽の鷺ようになる」に由来する。

61行 ゲルマーニア

ドイツの国土のアレゴリー。その起源は属州や地域を女性像として擬人化した古代ローマの習慣に遡る。ゲルマーニアの図像の最初期の例は1世紀に制作された奉納レリーフや貨幣などにみられ、例外はあるものの大抵は征服され、嘆いている姿をしている。以降もこの女性像はおもに支配の表象と結びつけられ、強大な権力の支配下にある存在として描かれることが多かった。しかしとりわけフランス革命後の戦争を契機として自立的かつ攻撃的な側面が強調されるようになる。ヘルダーリンのゲルマーニアもこうした一連の文脈に位置づけられるが、「このうえなく静かな神の娘」である「祭司」という設定は図像史上のいずれの類型とも合致しない。重要なのは神聖なる大地の名づけを行うのが詩人の「私」ではなくゲルマーニア、すなわちドイツひいてはそこに住むすべての人々であることが暗示されている点である。

63行 すべてを愛する者

112行で言及される王ならびに民の助言者としての役割を先取りしている。

63行 重い幸運

原文ではein schweres Glück。「ライン」の「というのも担い難い（schwer）のは／不幸であるが、もっと担い難い（schwerer）のは幸運なのだから。」（204–205行）に同様の詩想がみられる。

第5詩節（65～80行）

65行 森

タキトッスの『ゲルマーニア』には、ゲルマン人が森に囲まれた土地に住んでいたことが記されている。文化に目覚める前のドイツが暗示されている。

68行 誇り

古代ゲルマン人は自然な純粋さと自由の感情をもち、誇り高い人々であるとするタキトッスの記述に由来すると考えられる。

68行 もっと卑しい者たち

驚よりもあとにゲルマーニアの誇りに気づいた周囲の民を指す。トイトブルクの森の戦いに参加した古代ローマ人を指すと解釈する者もいる。

70行 被造物の嘆息

「ローマ人への手紙」22節ならびに26節に由来し、「ヒュペーリオン断片（Fragment von Hyperion）」では「失われた楽園の感情」とよばれる。

72行 口の花

詩的言語の譬喩。「パンと葡萄酒」の90行では「いまや、いまやそのために言葉が、花のように生じなければならない」といわれ、「ディオティマ（Diotima）」初期稿の3行には「歌の花」とある。

73行 黄金の言葉

驚を介して受け取った詩的言語。黄金は言葉が神的なものであることを暗示する。

74行 さまざまな河流とともに

4行の注を参照。

74行 その言葉は滾々と湧き出て

それまで過去形であった動詞がここで現在形に切り替わる。

75行 すべての地域に注ぐ

創造的な詩的言語がドイツの隅々までいきわたることを暗示する。

76行 深淵を担う者

クナウプ版では「担う（trägt）」ではなく「問う fragt）」と判読。

第6詩節（73-96行）

81行 飲むがいい朝の風を

朝は神なき時代を表す「夜」が明けるとき。「曙光」（26行）がもたらされるのもこれと同じ時間帯である。「飲む」という行為は神々を行う「供犠の宴」（35行）を暗示する。

82行 開かれる

36行の注を参照。

90行 黄金

73行の「溢れんばかりの黄金の言葉」と対応している。

92行 天の怒り

神的なものの顕現を意味する雷光のこと。10-11行の注を参照。天の怒りにかんする記述は「ティターン族（Die Titanen）」85行や「しかし天上の者たちは…（Wenn aber die Himmlischen …）」16行にもみられる。

92行 昼と夜とのあいだ

これから訪れる夕暮れ。後期ヘルダーリンにおいて夕暮れは過去における神々の時代の終焉を指す場合と、未来において神的なものとの出会いが生じる時間帯を指す場合とがある。ここでは後者が暗示されている。「帰郷」では「私たちが／昼の生活から休むとき」（97-98行）、すなわち夕暮れときに神的存在との食事が行われる。「パンと葡萄酒」を参照。

94行 三重に書き換えるがよい

母なる大地のアレゴリーであるゲルマーニアは母の名前を呼ぶことはなく、自らの存在によってその存在を暗示するにとどまる。しかしゲルマーニアはそもそも言葉を発することさえなく、その存在は驚の発言によって間接的に察せられるにすぎない。さらに驚の発言は「私」による直接引用である。この意味において本詩はゲルマーニエンへの言及において三重の層をもっている。「三重に書き換えるがよい」という驚の命令がこのようにして実行に移されているとも解釈できる。

95行 口にしないでおく

神の名をみだりに口にすることを禁じる旧約聖書の掟と関係する。神的なものを直接名指すのではなく、際限のない「書き換え」によってその存在を暗示することこそが詩作の機能であると考えられている。「帰郷」第1稿101行には「私たちはしばしば沈黙せざるをえない、神聖なる名が欠けているのだ」とある。

第7詩節（97～112行）

97行 聖なる大地の娘

ゲルマーニアは「神の娘」であると同時に「大地の娘」でもある。

103行 時の中央

「過ぎ去った神的なもの」がいた「古の時代」(100行)と「来るべきもの」(102行)が属する未来とのあいだ、すなわち現在を意味する。「臆心」18行では「時の転回点(Wende der Zeit)」とよばれる。

105行 純潔の大地・エーテル

大地とエーテルとの「聖なる結婚」が暗示されている。そこから生まれるのがゲルマーニアである。

110行 祭司

デルポイの神託を告げる祭司のように、ゲルマーニアもまた神的なものを伝え、周囲に助言を与える存在である。

111行 武器を手になく

フランス革命にみられた暴力性とは無縁の非革命的で内面的な発展が暗示されている。武装することなく言葉で周囲の諸国に影響を与える祭司のイメージは、ドイツを文化国家とみなす当時の思想潮流と合致する。

112行 王たちと諸々の民に

ティトゥス・リウィウス(前59頃-後17頃)の『ローマ建国史』にみられる古い法律の慣用表現。これによってゲルマーニアの与える助言が政治的・法的な内容にもかかわることが暗示されている。